保育者効力感における一考察

―地域差・担当別の比較より―

岩　﨑　桂　子

A Consideration in the Preschool Teacher Efficacy

― Based on a Local Difference and Comparison According to the Charge ―

IWASAKI Keiko

キーワード：保育者効力感、人間関係、地域差・担当別

Ⅰ．はじめに

現在、我が国の保育の現場は変換期を迎え、日々目まぐるしく変化をしている。2008年に保育所保育指針の改定が行われ、それに伴い各保育所では保育内容の見直しを行っている。それに加え、子どもを取り巻く生活環境も変化し、家庭での教育機能の低下、地域の教育機能の喪失がクローズアップされる傾向にある。少子化、家族形態の変化、遊び場、友達関係、時間、地域生活の変化など、子どもの環境の変化を表すフレーズを挙げると数え切れない。その背景には、保護者のライフワークの変化、社会情勢などが複雑に関係している。子どもや保護者と密接に関わりを持つ保育者として、日々変化を続ける環境に敏速に対応し、質の高い保育を提供することが求められている。一人一人の子どもの成長に見通しを持ち、子どもの成長に合わせた園生活が送れるようにカリキュラムを作成するなど、臨機応変に柔軟に物事に対応できる能力を必要とされ、保育技術のみならず、人間性、保育に対する専門知識の向上などが重要な鍵となる。そのため、保育に携わる保育者（保育士・幼稚園教諭）自身も、社会の変化、地域の特性、保護者の意見に耳を傾け日々変化を続ける必要があるだろう。その中で、保育能力に関する要因の一つとして「保育者効力感」という概念が注目されている。

近年の保育者の専門性に着目した研究で高濱祐子（2000）[注1)]は、保育者を対象にし、経験年数とある場面においての対応についてのプロセスの違いを明らかにしている。対応の違いについては、対応の難しい幼児に対しては問題解決に使われる手段は、新任者よりも経験者のほうがはるかに問題解決策の選択肢を準備できると報告している。

また、中村多見（2006）[注2)]は保育学生に対して、実習を通しての保育観の変化について調査し、実習経験を通して保育者効力感に及ぼす影響について研究を行っている。大城りえ・上地亜矢子・津多久美子（2006）[注3)]もまた、保育科の学生に対して、保育者効力感に影響を与える要因として、保育職志望度、実習満足度、子ども観を取り上げている。結果、保育者効力感は実習後に高くなることを報告している。その他、保育者効力感と学生、実習を対象とした研究として玄永牧子（2008）[注4)]や、石川隆行（2005）[注5)]、今野亮（2009）[注6)]三木知子・桜井茂男（1998）[注7)]などの先行研究が挙げられる。

これらの先行研究からも、子どもの生活に密接し影響を与える保育者の保育者効力感の研究を行う必要性は極めて高い。しかし、保育者効力感研究の歴史は浅く、特に保育現場にいる保育者を対象とした研究は数少ないことから、本研究で保育現場に直結した保育者を対象とした保育者効力感

研究を行うことの重要性は高いと考えられる。

三木・桜井（1998）[注8)] は保育者効力感を「保育現場において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことのできるであろう保育的行為をとることができる信念」と定義している。その後、西山修（2006）[注9)] は三木・桜井（1998）[注10)] の作成した保育者効力感尺度に「人間関係」の領域を加え、再検討を行っている。その結果、保育者効力感を「子どもの人と関わる力の育ちに変化を与えることができるという保育者の信念や実現可能性の認知」と新たに定義し直している。

本研究では、子どもの人間関係をはぐくむ保育者の保育者効力感を検証するため、西山（2006）[注11)] の「人間関係」を加えた保育者効力感尺度を使用し、保育者効力感の地域差、乳児クラスの担任、幼児クラスの担任、主任などに分類し、保育者効力感の変化について検証を行うことを目的とする。保育者効力感の地域差を検証することは、子どもを取り巻く環境によって保育者の意識の変化はみられるのか、また、担当する子どもの年齢によって保育に対する意識の違いはあるのかについて検証し、実際の保育現場における保育者効力感の現状を調査する。

なお、保育者効力感における詳細は、本研究の執筆者である岩﨑桂子の先行研究（2009）[注12)] を参照して頂きたい。

Ⅱ．方法

西山（2006）[注13)] の保育者効力感尺度を使用する。この保育者効力感尺度は５因子に分かれており７件法で回答するものである。各因子と項目については表１に記載する。

表１「人間関係」保育者効力感尺度 [注14)]

項目設定	尺　度　項　目
第１因子	人とかかわる基盤をつくる　a=.835
1	信頼される存在として子どものそばにいること
6	子どもにとって心のより所になること
11	子どもとの安定した関係を築くこと
16	子ども一人一人をありのままに受容すること
21	子どもの自我（思い、言い分）を大切にすること
第２因子	発達的視点で子どもを捉えること　a=.887
2	子どもの人間関係の発達に応じてかかわること
7	子どもの人間関係の育ちに即して、環境を構成すること
12	子どもの人間関係の発達について、見通しをもって援助すること
17	保育の展開と人間関係の育ちを結び付けて捉えること
22	子どもの人間関係の育ちについて専門的な知識を生かすこと
第３因子	子ども同士の関係を育てる　a=.872
3	けんかや葛藤を経ながらも、子ども同士で解決できるように援助すること
8	自己主張や反抗も自我の育ちと捉えて適切に対応すること
13	子どもが他の子どもの発言や気持ちを受け入れられるよう援助すること
18	園生活の中で、必要な道徳性を身につけるように保育すること
23	子どもが友達とかかわることで充実感や満足感を味わえるような保育をすること
第４因子	基本的な生活習慣・態度を育てる　a=.865
4	子どもが生活上のルールを知ることができるように保育すること
9	社会生活上の習慣や態度を子どもが身につけていけるよう援助すること
14	きまりや約束の大切さに気付き、守ろうとする態度が育つ保育をすること
19	子どもがよいことや悪いことがあることに気付き、行動できるよう実践すること
24	園生活の中で子どもの自立心を育むこと
第５因子	関係性の広がりを支える　a=.839
5	地域のお年寄りなど身近な人に感謝の気持ちがもてるよう実践すること
10	子どもが地域の人々など自分の生活に関係のある人に親しみをもてるよう援助すること
15	特別な支援を要する子どもも含めたクラスの豊かな関係をつくること
20	外国の人などの文化の違いに気付き、尊重する心が育つよう保育すること
25	子どもが様々な人と触れ合いながら人間関係を広げていけるよう援助すること

表２　保育者効力感と都市部と地方のｔ検定

	都市部	地方	ｔ値
人数	100	133	
１．人とかかわる基盤をつくる	23.63（3.53）	23.33（3.42）	-0.65
２．発達的視点で子どもを捉えかかわる	19.89（3.40）	21.17（3.67）	2.74**
３．子ども同士の関係を育てる	21.66（3.20）	22.37（3.36）	1.64
４．基本的な生活習慣・態度を育てる	22.55（3.39）	23.09（3.26）	1.23
５．関係性の広がりを支える	20.06（3.44）	20.89（3.23）	1.87+

**：p<.01　+：p<.10

（１）保育者効力感における地域差について

調査日：2009 年７月～９月

対象者：保育所、幼稚園に勤務する保育者である。地域は東京、埼玉、大阪、京都、兵庫、岩手、奈良、香川、熊本、広島である。合計 224 名である。

調査方法：質問紙による７件法による。1「全く自信がない」、2「かなり自信がない」、3「やや自信がない」、4「どちらとも言えない」、5「やや自信がある」、6「かなり自信がある」、7「非常に自信がある」のあてはまるものをかっこ内に記入する。フェイスシートとして、被験者の性別、年齢、現在の役職、保育者歴、園の所在地について記入を求めた。

（２）保育者効力感における担当別について

調査日：2009 年７月～９月

対象者：保育所、幼稚園に勤務する保育者である。地域は東京、埼玉、大阪、京都、兵庫、岩手、奈良、香川、熊本、広島である。合計 224 名である。

調査方法：子どもの担当別に５グループに分類した。今回の研究では、乳児・幼児の区分については保育所で分けられている区分をもとに分類した。乳児期を０～２歳、幼児期を３～５歳とする。①乳児（0～2歳）担任 98 人、②幼児（3～5歳）担任 82 人、③フリー（一時保育担当、支援センター担当を含む）20 人、④主任（副園長を含む）12 人、⑤乳児から幼児（2～3歳）担当 12 人の合計 224 人

Ⅲ．結果

（１）保育者効力感における地域差について

都市部を東京、埼玉、大阪、京都、兵庫とし、地方を岩手、奈良、香川、熊本、広島に分け保育者効力感の各因子とｔ検定を行った結果、第２因子の「発達的視点で子どもを捉えかかわる」は都市部より地方が有意に高い（p<.01）結果が得られた。また、第５因子の「関係性の広がりを支える」は都市部よりも地方が高い傾向にあるという結果が得られた。

都市部の被験者は 100 人、地方の被験者は 133 人である。

（２）保育者効力感と担当別について

被験者 244 人を①乳児（0～2歳）担任 98 人、②幼児（3～5歳）担任 82 人、③フリー（一時保育担当、支援センター担当を含む）20 人、④主任（副園長を含む）12 人、⑤乳児から幼児（2～3歳）担当 12 人の５群に分け、保育者効力感の分散分析と多重比較を行った。結果、１要因の分散分析では、第１因子は主効果なし、第２因子は主効果あり（F = 2.991　p<.05）、第３因子は主効果なし、第４因子は主効果なし、第５因子は主効果ありの傾向がみられた。

表３　１要因の分散分析

第１因子・・・主効果なし（F=.636）
第２因子・・・主効果あり（F=2.991　p<.05）
第３因子・・・主効果なし（F=1.088）
第４因子・・・主効果なし（F=1.687）
第５因子・・・主効果ありの傾向（F=2.362　p<.10）

分散分析で、群間の主効果がみられた、第２因子と第５因子を多重比較した結果、第２因子では２群（幼児担当）より４群（主任等）のほうが有意に高い結果が得られた（p<.01）。また１群（乳児担当）より４群（主任等）のほうが有意に高い結果が得られた（p<.05）。

第５因子では３群（フリー等）より４群（主任等）のほうが有意に高い結果が得られた（p<.05）。１群（乳児担当）より４群（主任等）のほうが有意に高い結果が得られた（p<.05）。

表４　第２因子と５群の多重比較

効力感の値	多重比較の結果
① 20.63	
② 20.15	
③ 20.60	p<.01　p<.05
④ 24.08	
⑤ 20.67	

表５　第５因子と５群の多重比較

効力感の値	多重比較の結果
① 20.40	
② 20.28	
③ 20.20	p<.05　p<.01　p<.05
④ 23.67	
⑤ 20.75	

さらに、１群の乳児担当保育者（99 人）と２群の幼児担当保育者（82 人）のみでのｔ検定を行った結果、第１因子で、２群の幼児担当保育者より１群の乳児担当保育者のほうが有意に高い結果が得られた（p<.10）。

表６　乳児担当保育者と幼児担当保育者のｔ検定

因子	①乳児	②幼児	ｔ値
第１因子	23.82	22.87	1.88（p<.10）
第２因子	20.63	20.15	0.87（n.s.）
第３因子	22.16	21.60	1.15（n.s.）
第４因子	23.12	22.38	1.52（n.s.）
第５因子	20.40	20.28	0.28（n.s.）

Ⅳ．考察

（１）保育者効力感と地域差について

今回の研究から、「発達的視点で子どもを捉えかかわる」という因子は都市部より地方のほうが有意に高いことがわかった。このことから、地方では地域のつながり、子ども同士のつながりが都市部に比べて存在しているのではないだろうか。地方では日常生活の中に近隣とのつながりがあり、大人の援助が受けやすい発達環境にあるため、保育者も近隣との関係を無理に意識しなくとも自然と持てる環境にあると認識しているのではないかと考えられる。また、小さい地域では子どもの人数も限られ、保育園・幼稚園に入園している子どもたちは以前からの知り合いである場合もあるだろう。そして、第２因子の項目に「子どもの人間関係の発達について見通しをもって、援助すること」とあるが入園から卒園まで一貫した保育が行える環境にあるのではないかと考えられる。

一方、都市部では、子育てというと各家庭で行うのが一般的で、核家族の場合世代間や近隣との関係も希薄になりやすい傾向にある。そのため、子どもの発達が家庭に影響されやすい傾向にあるのではないかと思われる。その結果、保育所保育指針や保育の教科書にあるような、一般的な子どもの発達とは違う傾向にある子どもが存在しやすいのではないだろうか。都市部での待機児童数は増加傾向にあり、保護者は少しの間でも子どもを預けたいという意識から園に入園している子どもの入れ替わりも地方と比べると激しいのではないかと推測される。そのため、第２因子の項目にあ

る「保育の展開と人間関係の育ちを結び付けて捉える」や「子どもの人間関係の育ちについて専門的な知識を生かすこと」というような項目に対して、戸惑いを感じやすく、日々手探りの保育を行わざる負えないのではないかと推測される。また、注目したい点として第５因子の「関係性の広がりを支える」では、比較的地域に密着している地方と核家族化が進み地域との関係が希薄になってきている都市部で大きな差があるのではないかと考えられるが、実際は大きな差を示していない。そこには、都市部の特徴が関係しているのではないかと考えられる。第５因子の「関係性の広がりを支える」の項目に「外国の人などの文化の違いに気付き、尊重する心が育つよう保育すること」とある。この項目は都市部で保育を行う保育者のほうが意識しやすい環境にあるのではないだろうか。また、第５因子の項目で、「特別な支援を要する子どもも含めたクラスの豊かな関係をつくること」とあるが子どもの人数が多い都市部では、特別な支援を要する子どもの人数も地方に比べて多いのではないかと思われる。決して、地方に外国の子どもや特別な支援を要する子どもがいない訳ではないが、都市部の特徴として対象となる子どもの数が多く保育者の経験数が多いことにあるのではないかと推測した。

（２）保育者効力感と担当別について

１要因の分散分析の結果から、第２因子の「発達的視点で子どもを捉える」に主効果があることが分かった。また有意な主効果ではないが第５因子の「関係の広がりを支える」でも主効果の傾向があることが分かった。このことから、第２因子の「発達的視点で子どもを捉える」と１群（乳児担当）、２群（幼児担当）、３群（フリー等）、４群（主任等）、５群（乳児から幼児担当）の多重比較の結果から、幼児担当保育者、乳児担当保育者より主任等のほうが発達的視点で子どもを捉えることができると感じていることになる。これは、主任になる保育者の保育歴が関係しているのではないかと考えられる。子どもの発達を時間軸で捉える事が出来て、その先にある子どもの成長を見通せるのではないだろうか。この結果から、保育者養成校では、子どもの発達を年齢別に見るだけではなく、時間軸を追って学習する必要があるだろう。第５因子においても、乳児担当保育者、幼児担当保育者、フリーの保育者よりも、主任等のほうが「関係の広がりを支える」ことができると感じている。主任になる保育者の年齢等を考えても地域に根付いているのではないかと考えられる。様々な子どもの保育を行い、数々の保育を行う中で成功した経験や失敗した経験を踏まえて、保育に対する自信につながるのではないだろうか。高濱（2000）[注15)] は、保育者を対象にし、経験年数とある場面においての対応についてのプロセスの違いを明らかにしている。対応の違いについては、対応の難しい幼児に対しては問題解決に使われる手段は、新任者よりも経験者のほうがはるかに、問題解決策の選択肢を準備できるという先行研究を裏付ける結果になったといえる。

次に、乳児担当保育者と幼児担当保育者のみでｔ検定を行った結果、第１因子での関連がわかった。これは、第１因子の「人とかかわる基盤をつくる」という因子において、幼児担当保育者より乳児担当保育者のほうが有意に高い結果から、乳児担当保育者のほうが子どもにとっての保育者という信念を持っていることになる。乳児という人間関係の基礎をつくる時期や保育者との関係を重視する年齢が関係しているのではないだろうか。幼児期になると保育者対子どもという関係より生活習慣や友達との関係性を重視する年齢になるだろう。しかし、ｔ検定で有意な差として結果が出なかった背景には、乳児という成長過程の特性が関係しているのだろう。乳児とは０歳では、保育者を介して外界との接触を楽しみ生活していく年齢であるが、２歳になると友達とのやり取りや自我も芽生えてくる時期である。第１因子にある「子ども一人一人をありのままに受容する」などの項目について、日ごろから意識して保育したり、保育計画を立て保育を行うことで子どもからのフィードバックも早く感じることができる立場にいるのではないだろうか。

Ⅴ．総括

今回の研究を通して、保育者効力感の地域差を検討していく中で、本来、保育に地域差があってはいけないのではないかという思いが出てきた。しかしながら、地域の特色や現状は大きく違う点があるのも事実である。地域に即した保育や保護者の求めるニーズはそれぞれで、保育を福祉サービスと捉えて考えると保育のどこに重点を置き目指すのかに違いが出てくるのは仕方がないのだろう。また、乳児担当、幼児担当で子どもの成長の違いから乳幼児期の人とかかわる育ちの過程が違うという要因からの結果になったのだろう。主任等の役職に就く保育者とは保育において様々な経験をし、実現可能性に確信を持っているのだろう。

玄永（2008）[注16)]や石川（2005）[注17)]は保育学生が実習後に実習前より保育者効力感が減少するとしている。保育に対する理想と現実のギャップや就職を意識しての結果であるとされている。保育者養成校として、教科書にある発達過程や保育の一般的な方法だけでなく、地域に根差した保育や発達を時間軸で捉えることの大切さを指導していく必要を感じた。また、主任保育者のように、自信を持って保育を行うことを学生に要求するには難しい面が多いが、経験や職歴から見えてくる保育が存在することを伝えていく重要性を感じている。実習だけでなくボランティアや研修に積極的に参加し、保育の中で何に重点をおいて保育目標を掲げているのかなどについて指導することが、保育者効力感の向上に役立つのではないだろうか。そのためにも、第１に、保育者養成校の教員が保育について知識を深め、教科書には載っていない保育場面でのドラマを学ぶ必要を強く感じている。

注

1）高濱祐子「保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応」『発達心理学研究』第22巻　第3号、2000年

2）中村多見「保育学生の保育観（1）―保育者効力感の発達―」『高松大学紀要』第45巻、2006年

3）大城りえ・上地亜矢子・津多久美子「保育科学生の保育者効力感に関する研究」『沖縄キリスト教大学紀要』第35巻、2006年

4）玄永牧子「保育者養成コースの学生における保育者効力感に関わる要因」『福島学院大学研究紀要』第40集、2008年

5）石川隆行「保育者を目指す短大生の保育者効力感について―2月の追跡より―」『聖母女学院短期大学研究紀要』第34集、2005年

6）今野亮「保育者効力感に影響を及ぼす要因の検討」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』第30巻、2009年

7）三木知子・桜井茂男「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」『教育心理学研究』第46巻　第2号、1998年

8）同上、P83

9）西山修「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度」『保育学研究』第44巻　第2号、2006年、P150

10）前掲、「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」

11）前掲、「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度」

12）岩﨑桂子「保育者効力感研究の現状と課題」『小池学園研究紀要』第4号、2009年

13）前掲、「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度」

14）朝木徹・鈴木由美「子どもの人間関係を育む保育実践の要因―保育者効力感と子ども観の関連について―」『聖徳大学児童学研究紀要』第11号、2009年

15）前掲、「保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応」

16）前掲、「保育者養成コースの学生における保育者効力感に関わる要因」
17）前掲、「保育者を目指す短大生の保育者効力感について―2月の追跡より―」

参考文献

1）西松秀樹「教師効力感と不安に関する研究」『滋賀大学教育学部紀要』第55巻、2005年
2）松井仁・野口冨美子「教師のバーンアウトと諸因子―ストレッサー、効力感、対処行動をめぐって―」『京都教育大学紀要』第108巻、2006年
3）望木郁代「教育実習の教育力向上に関する研究」『高田短期大学紀要』第26号、2008年
4）春原淑雄「教育学部生の教師効力感とその関連要因」『教育心理学研究』第50回総会、2008年
5）坂野雄二「一般性セルフ・エフェカシー尺度の妥当性の検討」『早稲田大学人間科学研究』第2巻、第1号、1989年
6）成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子「特性的自己効力感尺度の検討―生涯発達的利用の可能性を探る―」『教育心理学研究』第43巻、第3号、1995年
7）伊藤崇達・神藤貴昭「自己効力感、不安、自己調整学習方略、学習の持続性に関する因果モデルの検証―認知的側面と動機づけ的側面の自己調節学習方略に着目して―」『日本教育工学会論文誌』第27巻、4号、2003年
8）葛西真記子「カウンセリング自己効力感尺度（Counselor Activity Self-Efficacy Scales）日本語版作成の試み『鳴門教育大学研究紀要』第20巻、2005年
9）佐藤裕基「自己効力感と性格特性との関連」『人間福祉研究』第12巻、2009年
10）三宅幹子「保育者効力感研究の概観」『福山大学人間文化学部紀要』第5巻、2005年
11）西坂小百合「幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響」『教育心理学研究』第50号、2002年
12）岩立志津夫・諏訪きぬ・土方弘子・金田利子・木下孝司・斎藤政子「保育者の評価に基づく保育の尺度」『保育学研究』第35巻、第2号、1997年
13）嘉数朝子・渡嘉敷あゆみ「保育者効力感と幼児のコミュニケーション・スキル―保育職志望度との関連で―」『日本保育学会大会研究論文』第53号、2000年
14）森知子「保育者を志す学生の自己効力感と実習評価の関連」『臨床教育心理学研究』第29号、2003年
15）諏訪きぬ「人的環境としての保育者（総説）」『保育学研究』第42巻、2004年
16）渡部努・嶋崎博嗣「保育者の保育者効力感と心理社会的要因に対する過去の遊び経験の影響」『日本保育学会大会研究論文集』第57巻、2004年
17）小原敏郎・武藤安子「保育の質とレジリエンス概念との関連」『日本家政学会誌』第56巻、第9号、2005年
18）春原淑雄「教育実習体験が教育学部生の教師効力感に及ぼす影響」『学校教育学研究論集』第17号、2008年
19）西松秀樹「教師効力感、教育実習、教師志望度に及ぼす教育実習の効果」『キャリア教育研究』第25号、2008年
20）塚本美知子・森川文子・薮中征代・徳永静江・大熊光穂「保育者養成における実習経験が社会スキルおよび保育者効力感に及ぼす影響」『聖徳大学児童学研究所紀要』第10号、2008年

資料１　保育者効力感質問紙

保育に関する質問

東萌保育専門学校　　岩﨑　桂子

今回、現場で保育を行う先生方にどのような信念を持ち、日々保育を行っているのかについて、お聞きしたいと思います。

尚、この質問に答えて頂いた結果は、すべて数値化し分析のみに用います。得られた情報は外部に漏れることのないように管理を徹底いたしますので、あまり深く考えず素直にお答えください。

お忙しい中、お手数をお掛けしますが、ご協力のほどよろしくお願いします。

当てはまるものに〇を付け、記入してください。

①性別　　男・女
②年齢　　歳
③現在の役職　　園長・主任・（　　）歳児担任・フリー・その他（　　）
④保育者歴　　（　　）年
⑤園の所在地　　（　　）県（　　）市・町・村

次のページから質問項目が始まります。

保育に関する質問

以下の質問について、保育者としてご自身はどのような保育を心掛けているかを、１「全く自信がない」、２「かなり自信がない」、３「やや自信がない」、４「どちらともいえない」、５「やや自信がある」、６「かなり自信がある」、７「非常に自信がある」、の１～７の数字でお答えください。

１、信頼される存在として子どものそばにいること　（　）
２、子どもの人間関係の発達に応じてかかわること　（　）
３、けんかや葛藤を経ながらも、子ども同士で解決できるように援助すること　（　）
４、子どもが生活上のルールを知ることができるように保育すること　（　）
５、地域のお年寄りなど身近な人に感謝の気持ちが持てるよう実践すること　（　）
６、子どもにとって心のより所になること　（　）
７、子どもの人間関係の育ちに即して、環境を構成すること　（　）
８、自己主張や反抗も自我の育ちと捉えて適切に対応すること　（　）
９、社会生活上の習慣や態度を子どもが身につけていけるよう援助すること　（　）
10、子どもが地域の人々など自分の生活に関係のある人に親しみを持てるよう援助すること　（　）
11、子どもとの安定した関係を築くこと　（　）
12、子どもの人間関係の発達について、見通しを持って援助すること　（　）
13、子どもが他の子どもの発言や気持ちを受け入れられるように援助すること　（　）
14、決まりや約束の大切さに気づき守ろうとする態度が育つ保育をすること　（　）
15、特別な支援を要する子どもも含めたクラスの豊かな関係を作ること　（　）
16、子ども一人一人をありのままに受け入れること　（　）
17、保育の展開と人間関係の育ちを結び付けて捉えること　（　）
18、園生活の中で、必要な道徳性を身に付けるように保育すること　（　）
19、子どもが良いことや悪いことがあることに気づき行動できるよう実践すること　（　）
20、外国の人などの文化の違いに気づき尊重する心が育つよう保育すること　（　）
21、子どもの自我（思い・言い分）を大切にすること　（　）
22、子どもの人間関係の育ちについて専門的な知識を生かすこと　（　）
23、子どもが友達と関わることで充実感や満足感を味わえるような保育をすること　（　）
24、園生活の中で子どもが自立心を育むこと　（　）
25、子どもが様々な人と触れ合いながら人間関係を広げていけるよう援助すること　（　）

（東萌保育専門学校専任教員　岩﨑桂子）